

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19320048

研究課題名（和文） 視覚芸術とその文学的言説をめぐる総合研究

研究課題名（英文） Comparative Studies on the Relationship between the Visual Arts and Its Critics

研究代表者

今橋 映子（IMAHASHI EIKO）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20250996

研究成果の概要（和文）：

本研究は4年間にわたって行われ、「視覚芸術を言葉で語る」という営為に注目しそれを総合的に研究した。本研究は前半・後半2年ずつ、別テーマを設定し、予期していた以上の成果を上げることができた。

前半2年間では「20世紀フォトジャーナリズムにおけることばの機能」をテーマとし、映像と言葉との関係を徹底的に分析した。成果は、『フォトリテラシー：報道写真と読む倫理』（中公新書、2008年）というかたちで公刊。一般読者にも広く還元できるよう努力し、幸いにも多くの反響を得ることができた。

後半2年間では「近代日本美術批評の成立」と題し、今度は美術批評と言葉の機能の連関に着目した。とりわけ美術批評家・岩村透に光を当てて研究した。これはその後、同時代文学や初期社会主義、文化行政、欧米美術界の動向など、まさに膨大な領域に属する問題であることが判明し、現在、別の刊行本（出版社企画決定済み）に成果を一挙に発表すべく、鋭意執筆中である（原稿予定枚数＝400枚換算1700枚、現在約900枚執筆済み）。

研究成果の概要（英文）：

This study started with a 4-year plan, of which this is the last year. The study has proceeded smoothly as planned. For the first two years, I chose the topic "Word and Image in the 20<sup>th</sup> Century Photojournalism" and closely examined its poetics and politics. I compiled and published the results of that study as a book, which was published in 2008 (*Photo-literacy: Ethics of reading photography*, Chuo-Koronshinsha, May, 2008, 256p.).

In the last two years, the other topic "Word and Image in the Art Critical Writings in the Modern Japan". Especially I chose to focus on Iwamura Toru who was the most important art critic in Meiji-Taisho Era. I will compile the results of that study into the other book, which will be published in a few years. Through this research project I substantially clarified the domain, subjects, and specific representations for discussion in future comparative art criticism through the publication of the two above-mentioned books.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
総計	6,100,000	1,830,000	7,930,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目： 文学 / 各国文学・文学論

キーワード： 比較文学、比較芸術、フォトジャーナリズム、美術批評、岩村透、写真、文学と美術

### 1. 研究開始当初の背景

比較文学比較文化研究において、視覚芸術と文学的言説をめぐらる問題に関する研究は、まだ発展途上だと言える。とりわけ「絵画と文学」関連のテーマ研究が先行してきたが、「文学」を狭い範囲のジャンルに捉える傾向は続いている。「文学的言説」を、本研究課題のように、写真をめぐる「ことば」あるいは「美術批評」のようなテキストまで拡張する試みは、国内外でもほとんどなされていない。また理論的研究もまだ遅れていると言える。これは海外においても同様である。

研究代表者はこれまで、パリと外国人芸術家たちとの関係を中心とした表象研究および比較文学比較文化研究に従事してきたが、その中で、「視覚芸術とことば」のクロスジャンルの研究の重要性に次第に気づき、数年来その研究を続けてきた。

今回の研究を開始するに至った中には、クロスジャンル研究の中でも、フォーマリズム的な手法でなく、今回はとりわけ、社会的事象や歴史的事実に絡む事象を具体例として、この問題をより深く追究したいという目的があつて、上記研究課題に行き着いた。

### 2. 研究の目的

本研究は「視覚芸術をことばで語る」という営為にとりわけ注目して、その意味と機能を、具体的テーマに即しながら、組織的に分析することを目的としてきた。

(1) 前半2年間では「20世紀フォトジャーナリズムにおけることばの機能」をテーマとし、映像と言葉との関係を徹底的に分析することを目的とした。

そのためには、従来、社会学領域で進化してきた「メディア・リテラシー」の概念を援用しながら、これを写真というメディアに特化し、なおかつ、芸術史と社会史、メディア史のすべてを横断するような思考が可能であるような研究を目的とした。

(2) 後半2年間では「近代日本美術批評の成立」をテーマとし、美術批評と言葉の機能の連関に着目した。とりわけ美術批評家・岩村透に光を当てて研究した。これは単に岩村透についての人物作品研究ではなく、一体「美術批評」とはいかなるテキストなのかを明らかにする目的をもっている。これまでの美術史研究とは異なって、美術批評のテキストそのものを狙上の載せるため、それが掲載されていた美術雑誌、文学雑誌、新聞などの媒体を徹底的に検索し、岩村透の「全著作リスト」を作成することはもちろんのこと、周囲の重要な美術批評家たちの仕事を網羅し、発掘し、また黒田清輝、久米桂一郎、森鷗外、夏目漱石、堺利彦、幸徳秋水などの美術家、思想家、作家たちとの関係も十全に解き明かすことを目的とする。

さらには岩村透をテーマとすることによって、明治大正期の美術をめぐらる言説の流れを描写するのみならず、美術に関する施設、情報、団体、展覧会などが確立していく時代と、国家レベルにおける文化行政との関係についても、初めて明らかにすることができた。

### 3. 研究の方法

(1)前半の研究では、写真史研究に文学理論およびメディア・リテラシー研究を導入して、「写真を読む」とはいかなる営為なのかを組織的に解析する、という方法を取った。これ

は全くこれまで行われなかった試みであり、社会学とメディア史を文学的テキスト研究に接続する方法である。

また、具体的時代と地域については、19-20世紀ヨーロッパおよびアメリカ、それに近代日本を対象にして、写真というメディアに限っては、そうした地域に写真美学の「時間差」があまりなく、ほとんど「同時多発」的に、現代報道写真に共通する問題群があらわれることに着目した。これは比較研究(Comparative Studies)にも今後有効な視座を提供するものである。

(2)後半の研究では、美術史でのみ扱われてきた「美術批評」の諸テキストを、文学作品として敢えて扱うことにより、テキスト分析を可能にし、それが近代社会や美術界をいかなる関係をもっているか、コンテキスト解析を徹底的に行った。方法論的には、美術史学の作品研究に加えて、文学理論、雑誌新聞を解析するメディア研究、初期社会主義に関する社会史の方法を統合する試みである。

基盤としては、岩村透と同時代美術批評のテキストを、多くの雑誌新聞から網羅的に採取する方法を取り、その上で、上記の方法論を駆使して分析を行う。

#### 4. 研究成果

(1)前半の成果すべては、単著『フォト・リテラシー：報道写真と読む倫理』(中公新書、2008年)に公表した。

この単著では、従来メディア・リテラシーの一領域としか扱われていなかった写真を専らの対象として、「フォト・リテラシー」という全く新たな概念を独自に構築した。これによって、「写真を読む」という行為が、無自覚なものではなく、写真掲載媒体、キャプションやテキスト、写真家の個人史、同時代写真史、媒体メディアの性質や政治性、写真映像が本来持っている「物語性」—など、実に多くのファクターを、複雑かつ瞬時に判断しながら、私たちが写真を「読む」行為を行っていることが明らかになった。「フォト・リテラシー」は従って、「市民が写真メディアを、芸術史のおよびは社会的文脈の双方でクリティカルに分析し、評価できる力、延いてはその知識と倫理をもって、一方で歴史認識を精練し、他方で現在における多様なコミュニケーションを創り出す力を指す」(同書、8頁)と定義できる。

同書は、一般市民に広くこの研究を還元するためにあえて新書版で刊行したため、幸いにも刊行後、多くの反響を得ることができた。

そのテキストの一部は、高校生用の参考書等にも採用されている。(『ちくま評論入門—

高校生のための現代思想ベーシック』筑摩書房、2009年、52-61頁)

同書は、世界紛争や大震災など多くの困難な事象を生きる現代世界において、「写真を読む」ことのアクチュアルな意味を共有するための討論の場を、これからも提供しようと考えている。

(2)後半の研究では、「近代日本美術批評の成立」をテーマとして、岩村透を中心とする美術批評における「視覚芸術とことば」との関係性を研究した。岩村透(1870-1917)は、東京美術学校(現在の東京芸術大学)の初代美術史教授だが、病気で早逝したため、現代ではほとんど知られていない。しかし彼は、同じく美校教授の黒田清輝、久米桂一郎とともに「三羽鳥」と称されて、日本近代洋画界をリードする、大変重要な存在であった。

岩村が現代忘れられている要因には、47歳で早逝したことに加え、初期社会主義と何らかに関係した思想問題での政治的排除があったのではないかと従来推測もされてきた。

しかしいずれにせよ、岩村透の一次資料(雑誌掲載論文等)すら、全くと言って良いほど整備されてこなかった上に、美術史研究は、何と云っても「絵画」等の「作品」研究こそが中心であっただけに、「美術批評」などのテキストは、完全にその研究補助資料と見なされてきた感がある。

本研究課題はそれに着目して、「文学テキスト」の範囲を柔軟に捉える〈比較文学〉の手法を駆使し、明治大正期の美術批評家たちの仕事を改めて掘り起こし、岩村透を中心として「日本近代美術批評史」を再構築しようとする壮大な計画である。

その研究経過の中で、岩村透という美術批評家が、(彼自身が)画家出身であることに加え、美術史研究者、美術大学教授、美術家連盟等の組織者、美術雑誌主幹、美術情報に関わるドキュメンタリスト、美術行政家・・・等、実に様々な顔と仕事をこなす、超人的な人物であることが明らかになり、その周囲に集まる人々の思想的背景、美術的技能なども図抜けて深いことがわかってきた。

また岩村透を研究するという事は、同時代文学や初期社会主義、文化行政、欧米美術界の動向など、まさに膨大な領域に属する問題であることを意味する。現在、そのすべての成果を刊行本(出版社企画決定済み)に一挙に発表すべく、鋭意執筆中である(原稿予定枚数=400枚換算1700枚、現在約900枚執筆済み)。

関連して2010-2011年度は、本研究課題から派生した将来性のあるテーマが、科学研究

費補助金「挑戦的萌芽研究」としても採択されている（「明治大正美術専門雑誌における西欧美術情報の移入と波及に関する研究」）ことを、申し添える。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

**\*以下全て単独執筆・査読無し**

〔雑誌論文〕（計1件）

今橋映子「都市写真におけるニュー・ヴィジョン—モイ・ヴェール『パリ』をめぐって」（『知の遠近法』講談社選書メティエ、2007年、pp. 98-121）

〔学会発表、講演会〕（計8件）

1. 今橋映子「隠れた援助者の見た夢と〈世界周遊奨学金〉」（招待シンポジウム発表）（渋沢栄一記念財団シンポジウム「渋沢栄一とアルベール・カーン 日仏実業家の交流と社会貢献」、2010年3月21日 於：日仏会館）

2. 今橋映子「明治・大正期美術批評の転換期—ラスキン・岩村・ボードレール」（招待基調講演）（ラスキン文庫25周年記念シンポジウム「ラスキンと明治美術」主催：ラスキン文庫、2009年9月26日 於：中央大学駿河台記念館）

3. 今橋映子「パリに死す——両大戦間パリと外国人芸術家の運命」（大原美術館 第35回美術講座 2009年8月1日、於：大原美術館）

4. 今橋映子「展覧会カタログの大学（院）の美術教育」（学会シンポジウム招待発表）（『展覧会カタログ総覧』刊行記念シンポジウム「いま、あらためて展覧会カタログを見直す」、主催：アート・ドキュメンテーション学会、2009年3月20日 於：和光大学）

5. 今橋映子「日本人のパリ写真—福原信三とピクトリアリスムの転換期」（国際シンポジウム発表）（国際シンポジウム「日仏交流の150年」主催：日仏会館、2008年11月23日 於：日仏会館）

6. 今橋映子「19世紀都市パリの新たな表現——版画家たちの挑戦」（ブリヂストン美術館土曜講座「パリと近代芸術家たち」第4回講座 2008年11月5日 於：ブリヂストン美術館）

ン美術館）

7. 今橋映子「1920年代の都市パリと郊外—佐伯祐三の眼」（「没後80年佐伯祐三—鮮烈なる生涯」展 美術講演会 2008年8月2日 於：三重県立美術館）

8. 今橋映子「エコール・ド・パリと外国人芸術家たち」（「キスリング」展講演会 2007年7月7日 於：茨城県立近代美術館）

〔図書〕（計2件） **\*すべて単著である**

1. 今橋映子『フォトリテラシー：報道写真と読む倫理』（中央公論社、中公新書、2008年、256頁）

2. 今橋映子『近代日本美術批評の成立』（仮題）近刊予定

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

今橋 映子 (IMAHASHI EIKO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20250996

(2) 研究分担者：無し

(3) 連携研究者：無し